飛鳥川の系譜

小倉　久美子

はじめに

飛鳥川[1]は、竜在峠附近を水源とする河川である。高市郡明日香村祝戸で冬野川（細川）と合流し、大和三山の間を西北に流れ、その後は北上して橿原市を通り、河合町付近で大和川と合流する。飛鳥川という名称は『万葉集』に見られ、さらに後代においても数多くの和歌に詠み込まれている。本稿では、和歌という限られた世界ではあるが、連綿と詠み継がれている飛鳥川の享受のあり方を探っていきたい。なぜなら、飛鳥川の享受のあり方を知るということは、すなわちそれは飛鳥の享受を解明することにつながると考えるためである。

『枕草子』には「河は、飛鳥川。淵瀬も定めなく、いかならむと、あはれなり。」とある。平安貴族が飛鳥川に接する機会は少なく見ることもほとんどなかっただろうにも関わらず、河の代表格として一番に挙げられるのが飛鳥川であった。それだけ飛鳥川は『万葉集』以降にも著名な河川であったのである。飛鳥の地名を冠していることもあって、飛鳥川の名はかつて都のあった飛鳥をも彷彿とさせることがあったのかもしれない。

平安時代以降にも飛鳥川の名は生き続ける。たとえば茶の世界においてもそれはいえる。茶道具には銘がつけられたものが存在する。銘の名づけられ方には、形状によるもの、伝来に関わるもの、禅語・中国故事によるもの、謡曲・能楽・狂言によるもの、詩歌・俳句・狂歌・物語によるものなどがある。なかでも和歌による銘は歌銘という[2]。

歌銘をもつ茶道具は200個ほどあると考えられており、その由来は和歌集では『古今和歌集』『新古今和歌集』の歌がもっとも多く、物語作品では『伊勢物語』の歌が最多である[3]。なかには『万葉集』の歌から名づけられたものもあり、そのひとつが小堀遠州（1579～1647）によって「飛鳥川」という歌銘が付けられた茶入（中興名物）である。名づけられた経緯について『茶器弁玉集』には、遠州が堺で初めてこの茶入れを見たときには新しく思えたが、のちに伏見で再び見たとき古びた感じがしたため、「昨日といひ今日と暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」（『古今和歌集』341）によって命名したとある。挽家の側面にも確かにこの歌が彫られている。こうしたきっかけで生まれた茶入「飛鳥川」は、たんに名が付けられただけではなく、実際の茶会においても何らかの機能を果たしていたと考えられる[4]。

また、「香久山」という銘がつけられた茶碗もいくつか存在する。たとえば江岑宗左（1613～1672）によって命名された黒楽茶碗「香久山」は、「内外に亘りて黒釉の中に白き米粒の如き小點を現はし、内部に十個、外部に六個ばかりボツ、、と散點する此景色を「白妙の衣ほすてふ天の香久山」と云へる歌意に取りて命名せし者なるべし」（『大正名器鑑』實見記）という由来をもつ。香具山に白妙の衣が干される景は『百人一首』所収歌の「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣乾すてふ天の香具山」を通じて広く知られていたと考えられる。

このほか、『万葉集』の歌に由来すると考えられている歌銘をもった茶道具は、管見の限りで７つ存在する（次頁表参照）。

【表】万葉歌に由来する歌銘をもつ茶道具[5]

歌銘	命名者	種類	本歌	歌番号
朝寝髪	小堀遠州	茶入（名物）	朝寝髪われは梳らじ愛しき君が手枕触れてしものを	『万葉集』巻11・2578
あしべ	不明	茶碗	若の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさして鶴鳴き渡る	『万葉集』巻6・919
児手柏	小堀遠州	茶入（名物）	奈良山の児手柏の両面にかにもかくにも佞人の徒	『万葉集』巻16・3836
玉緒	小堀遠州	茶杓	初春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらく玉緒	『万葉集』巻20・4493
楢柴肩衝	小堀遠州	茶入（大名物） ※現在消失	御猟する雁羽の小野の楢柴の馴れは益らず恋こそ益れ み狩する狩場の小野の楢柴のなれはまさらで恋ぞまされる	『万葉集』巻12・3048 『新古今和歌集』巻11・1050
走井	不明	茶入	落ち激つ走井水の清くあれば措きてはわれは去きかてぬかも 走り井のほどを知らばや相坂の関引き超ゆる夕かげの駒 逢坂の関とは聞けど走井の水をばえこそとゞめざりけれ	『万葉集』巻7・1127 『拾遺和歌集集』巻17・1108 『後拾遺和歌集』巻9・500
槇の葉	小堀正之	茶碗	時雨の雨間無くし降れば真木の葉のあらそひかねて色づきにけり	『万葉集』巻10・2196

以上のように、言語のみで成立している和歌が、それとは別の次元へと昇華されていくという文化的展開をみせるのである。飛鳥川でいえばそれは茶入「飛鳥川」にあたる。ただし、これは茶道具の銘に限らず、香木[6]や太刀[7]、絵画、蒔絵手箱、小袖の文様、庭園の築造などさまざま媒体においてもみられるということには留意しておきたい[8]。

そこで、飛鳥川に内包されるイメージはどのように形成され、享受されていったのか。古代の人々が飛鳥川に対してどのような思いを抱いていたのかを探っていきたい。

1．『万葉集』にみる飛鳥川

『万葉集』には「飛鳥（明日香）川」「飛鳥（明日香）の川」という言葉が25箇所にみられる。そのうち、長歌は4首、短歌は20首である。以下にそれらをすべて挙げ、検討していく。

（A）柿本朝臣人麻呂の泊瀬部皇女・忍坂部皇子に献れる歌一首并せて短歌

飛鳥の 明日香の河の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らばふ 玉藻なす か寄りかく寄り 靡かひし 嬬の命の たたなづく 柔肌すらを 剣太刀 身に副へ寝ねば ぬばたまの 夜床も荒るらむ〔一云 荒れなむ〕そこ故に 慰めかねて けだしくも 逢ふやと思ひて〔一云 君も逢ふやと〕玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉藻はひづち 夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故

（巻1の194）

（B）明日香皇女の木瓱殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂の作れる歌一首并せて短歌

飛鳥の明日香の河の 上つ瀬に 石橋渡し〔一云 石なみ〕下つ瀬に 打橋渡す 石橋に〔一云 石なみに〕生ひ靡ける 玉藻もぞ 絶ゆれば生ふる 打橋に 生ひをれる 川藻もぞ 枯るれば生ゆる 何しかも わご大君の 立たせば 玉藻のもころ 臥やせば 川藻のごとく 靡かひし 宜しき君が 朝宮を 忘れたまふや 夕宮を 背きたまふや うつそみと 思ひし時に 春へは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 敷栲の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かず 望月の いやめづらしみ 思ほしし 君と時々 幸して 遊びたまひし 御食向ふ 城上の宮を 常宮と 定めたまひて あぢさはふ 目言も絶えぬ しかれかも〔一云 そこをしも〕あやに悲しみ ぬえ鳥の 片恋づま〔一云 しつつ〕朝鳥の〔一云 朝霧の〕通はす君が

夏草の 思ひ萎えて 夕星の か行きかく行き 大船の たゆたふ見れば 慰もる 心もあらず そこ故に 為むすべ知れや 音のみも 名のみも絶えず 天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名に懸かせる 明日香河 万代までに 愛しきやし わご大君の 形見かここを

短歌二首

明日香川 しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにかあらまし〔一云 水の淀にかあらまし〕

明日香川 明日だに〔一云 さへ〕見むと思へやも〔一云 思へかも〕わご大君の御名忘れせぬ〔一云 御名忘らえぬ〕

（巻2の196～198）

(C) 神岳に登りて山部宿祢赤人の作れる歌一首并せて短歌

三諸の 神名備山に 五百枝さし 繁に生ひたる 栂の木の いや継ぎ継ぎに 玉葛 絶ゆることなく ありつつも やまず通はむ 明日香の 旧き京師は 山高み 河雄大し 春の日は 山し見がほし 秋の夜は 河し清けし 朝雲に 鶴は乱れ 夕霧に 河蝦はさわく 見るごとに 哭のみし泣かゆ 古思へば

反歌

明日香河 川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに

（巻3の324・325）

(D) 上古麻呂の歌一首

今日もかも 明日香の川 の夕さらず河蝦鳴く瀬の清けかるらむ

或本の歌の発句に云はく、明日香川 今もかもとな

（巻3の356）

(E) 八代女王の天皇に献れる歌一首

君により言の繁きを古郷の 明日香の川 に潔身しに行く

一尾に云はく、龍田越え御津の浜辺に潔身しにゆく

（巻4の626）

(F) （故郷を思へる）

年月もいまだ経なくに 明日香川 瀬々ゆ渡しし石橋も無し

（巻7の1126）

(G) 鳥に寄せたる

明日香川 七瀬の淀に住む鳥も心あれこそ波立てざらめ

（巻7の1366）

(H) 河に寄せたる

絶えずゆく 明日香の川 の淀めらば故しもあるごと人の見まくに

（巻7の1379）

(I) （河に寄せたる）

明日香川 瀬々に玉藻は生ひたれどしがらみあれば靡きあはなくに

（巻7の1380）

(J) 故郷の豊浦寺の尼の私房にして宴せる歌三首

明日香川行き廻る丘の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ

右の一首は、丹比真人国人

（巻8の1557）

(K) 河を詠める

今行きて聞くものにもが 明日香川 春雨降りて激つ瀬の音を

(巻10の1878)

(L) 黄葉を詠める

明日香川 黄葉流る葛城の山の木の葉は今し散るらむ

(巻10の2210)

(M)

明日香川 明日も渡らむ石橋の遠き心は思ほえぬかも

(巻11の2701)

(N)

飛鳥川 水行き増りいや日けに恋の増らばありかつましじ

(巻11の2702)

(O)

明日香川 行く瀬を速み早けむと待つらむ妹をこの日暮しつ

(巻11の2713)

(P)

飛鳥川 高川避かし越え来しをまこと今夜は明けずも行かぬか

(巻12の2859)

(Q)

葦原の 瑞穂の国に 手向すと 天降りましけむ 五百万 千万神の 神代より 言ひ継ぎ来たる 神南備の 三諸の山は 春されば 春霞立ち 秋行けば 紅にほふ 神南備の 三諸の神の 帯にせる 明日香の川の 水脈速み 生しため難き 石枕 苔生すまでに 新夜の さきく通はむ 事計 夢に見せこそ 剣太刀 斎ひ祭れる 神にし坐せば

(巻13の3227)

(R)

春されば 花咲ををり 秋づけば 丹の穂にもみつ 味酒を 神名火山の 帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の うち靡き 情は寄りて 朝露の 消なば消ぬべく 恋しくも しるくも逢へる 隠妻かも

反歌

明日香川 瀬々の珠藻のうち靡き情は妹に寄りにけるかも

右は二首

(巻13の3266・3267)

(S)

明日香川 下濁れるを知らずして背ななと二人さ寝て悔しも

(巻14の3544)

(T)

明日香川 塞くと知りせばあまた夜も率寝て来ましを塞くと知りせば

(巻14の3545)

(U)

明日香川 川門を清み後れ居て恋ふれば京いや遠そきぬ

右の一首は、左中弁中臣朝臣清麻呂の伝へ誦める、古き京の時の歌なり

(巻19の4258)

以上が『万葉集』における飛鳥川の用例である。ただし、（S）（T）は国名不明の歌として配列され、（L）は現在の奈良県高市郡明日香村の飛鳥川を対象として詠んだ歌ではない可能性が高い。また、（A）や（B）の長歌をみてみると、あくまでそれは「飛ぶ鳥の明日香」に流れる川であり、今にいう飛鳥川に限定されない。歌の内容をみても川そのものではなく、玉藻に主眼が置かれているようである。こうした例外となる歌はあるものの、全体を通してみてみると『万葉集』における飛鳥川にはある共通したイメージがみてとれる。それがつぎの①～④である。

①水量が多く流れの速い川であるというイメージ
（B）第一短歌、（C）短歌、（F）、（G）、（H）、（I）、（K）、（N）、（O）、（P）、（R）短歌の傍線部
②永遠に変わらない川であるというイメージ
（B）第二短歌、（F）、（M）の点線部
③神聖な川であるというイメージ
（D）、（E）、（Q）、（R）、（U）の波線部
④故郷である飛鳥に流れる川であるというイメージ
（E）、（F）、（J）の太線部

詠まれた歌としては①がもっとも多く、飛鳥川の歌の主要なイメージであったと考えられる。平安時代以降にも①のイメージに支えられた歌が多く詠まれ続けることから、和歌表現として常套化していったことがわかる。

②は、飛鳥川の「あす」という響きから「明日」を導き出すといった表現である。どちらかといえば序詞の働きに近い。ただし『古今和歌集』以降、飛鳥川はつねに変化する川というイメージが和歌表現のなかで定着する。これについて詳しくは後述する。

③は、「清けかる」（D）「清み」（U）すなわち清らかであるというイメージである。その清らかさゆえに禊をする川であり（E）、櫻井満氏[9]が（Q）（R）の解釈から飛鳥川には神奈備の川としての性質が備わっていたと論じるように、神聖な川であるイメージが形成されていたと考えられる。

④は、故郷をおもう歌のなかに飛鳥川が詠まれた用例である。『万葉集』において「故郷」という語は、基本的には飛鳥の地域を指す[10]。そのため、飛鳥川は飛鳥を代表する景物のひとつであったと考えらえる。

以上、『万葉集』にみえる飛鳥川のイメージはどのように享受されるのか。つぎに検討を試みたい。

2．八代集にみる飛鳥川

飛鳥川の享受の過程を探るために、八代集の歌にはそれがどのように詠まれているのか調査した。勅撰和歌集にはそれぞれの時代の規範が反映されていると考えるためである。その結果、『古今和歌集』に6首、『後撰和歌集』に8首（うち1首は重出歌）、『拾遺和歌集』に1首、『後拾遺和歌集』に1首、『千載和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』にはなく、『新古今和歌集』に4首、計19首の歌において飛鳥川が詠まれていることがわかった。順にみていきたい。

(a)

龍田川もみぢ葉流る神奈備の三室の山に時雨降るらし

又、飛鳥川もみぢ葉ながる

（『古今和歌集』巻5の284）

(b) 年の果てに、よめる　春道列樹

昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり

（『古今和歌集』巻6の341）

(c)　読人しらず

明日香川淵は瀬になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ

（『古今和歌集』巻14の687）

(d)

絶えずゆく明日香の川の淀みなば心あるとや人の思はむ

この歌、ある人のいはく、中臣東人が歌なり

（『古今和歌集』巻14の720）

(e)　読人しらず

世の中はなにか常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる

（『古今和歌集』巻18の933）

(f) 家を売りてよめる　伊勢

明日香川淵にもあらぬわが宿も瀬にかはりゆものにぞありける

（『古今和歌集』巻18の990）

(g) 女の、人のもとにつかはしける

ほかの瀬は深くなるらし明日香河昨日の淵ぞわが身なりける

（『後撰和歌集』巻9の525）

(h) 女に心ざしあるよしを言ひつかはしたりければ、世の中の人のさだめなければ頼みがたきよしを言ひて侍りければ　在原元方

淵は瀬になり変るてふ飛鳥河渡見てこそ知るべかりけれ

（『後撰和歌集』巻11の750）

(i) 題知らず　伊勢

厭はるる身をうれはしみ何時しかと飛鳥川をもたのむべら也

（『後撰和歌集』巻11の751）

(j) 返し　贈太政大臣

飛鳥河塞きて留むる物ならば淵瀬になると何か言はせむ

（『後撰和歌集』巻11の752）

(k) 言ひわづらひて止みにけるを、又思出でてとぶらひたまひ侍りければ、「いと定なき心哉」と言ひて、飛鳥河の心を言ひつかはして侍りければ

飛鳥河心の内に流るれば恋のしがらみ何時か淀まん

（『後撰和歌集』巻14の1013）

(l) 「定まらぬ心あり」と女の言ひたりければ、つかはしける

飛鳥河せきてとどめる物ならば淵瀬になるとなどか言はれん

（『後撰和歌集』巻14の1067）

(m) 題知らず

明日香河我が身ひとつの瀬淵ゆへなべての世をも怨つる哉

(『後撰和歌集』巻17の1232)

(n) 男の「人にもあまた問へ。我やあだなる心ある」と言へりければ

明日香河淵瀬に変る心とはみな上下の人も言ふめり

(『後撰和歌集』巻18の1258)

(o) 飛鳥の女王をおさむる時詠める　　人麿

飛鳥川しがらみ渡し塞かましば流るる水ものどけからまし

(『拾遺和歌集』巻8の498)

以上のように、三代集における飛鳥川の用例をみてみると、『万葉集』と類似する表現と異なる表現とがあることがわかる。類似することを示す用例は(a)(d)(o)である。(a)は(L)の本歌取りであり、(d)は(H)の、(o)は(B)第一短歌の少異歌であることがわかるためである。(a)は『拾遺和歌集』(巻4の219)に、

奈良の帝龍田河に紅葉御覧じに行幸ありける時、御供につかうまつりて　　柿本人麿

龍田河もみぢ葉流る神なびのみむろの山に時雨降るらし

と重出されている。題詞や詠み人を併記していかにも上代の歌である体裁を整えているが、『古今和歌集』が注記した飛鳥川の異伝は継承されていない。前述したように、(L)は今でいうところの飛鳥川を詠んだ歌ではなく葛城の地が対象となっている。(L)を本歌取りする歌が飛鳥川の名を失っていく過程は、和歌の世界において飛鳥川という名が現在の奈良県明日香村の飛鳥川に限定されていくことと軌を一にしているのではないだろうか。

一方、『万葉集』と異なる点としては、ひとつは飛鳥川に昨日や今日という言葉が結びつく表現(波線部)、もうひとつは淵瀬という言葉が結びつく表現(傍線部)がみられることが挙げられる。『万葉集』の場合、飛鳥川という言葉から明日という言葉を導く表現がみられたが(②)、『古今和歌集』以降には飛鳥川＝明日を踏まえたうえで昨日や今日といった言葉が導かれるようになった。さらに『万葉集』では飛鳥川の瀬と淀といった言葉とは別々の表現として詠まれていたが(①)、『古今和歌集』以降は淵・瀬という言葉がひとつの歌のなかで詠まれるようになった。これもまた『万葉集』にはみられない歌の詠まれ方である。

このように、『万葉集』とは異なる表現が2点みられることがわかった。このどちらもが詠み込まれているのが(e)である。この歌に関しては従来、飛鳥川の流れは絶えず変化するという概念から、人の世の変わりやすさを詠んだ歌であると理解されてきた。これに異を唱えたのが杉浦清志氏[11]である。杉浦氏は、『万葉集』の飛鳥川が不変の対象として詠まれていることから、その川が変化したことに人々が衝撃を受けたゆえに、世の無常を抱いたのである、と主張された。

この説に対して横山聡氏[12]は、飛鳥川全体の変化というよりも淵瀬の変化に対して詠者は感慨を述べているのであり、あくまでも飛鳥川の存在は不変であった。流路の変化にこそ世の無常を抱いているのであり、従来の解釈を踏襲することに何ら問題はないと結論付けられている。

さらに、忠住佳織氏[13]はこれらの説とは別の観点から検討を加えられ、飛鳥川の淵瀬が形成される背景には涙川における淵瀬の用法が大きく影響したことを指摘されている。ただし、川村晃生氏[14]は飛鳥

川の淵瀬という表現は『万葉集』にもみられる、とされる。それはつぎのような万葉歌が傍証となっている。

三年辛未に大納言大伴卿の寧楽の家に在りて故郷を思へる歌二首
須臾も行きて見てしか神名火の淵は浅さびて瀬にかなるらむ　（巻6の969）

これは、天平3年（731）に大伴旅人が飛鳥を思って詠んだ歌である。飛鳥川という言葉はみられないが、甘南備に接して流れる川という表現は飛鳥川に備わっているため（③）、『古今和歌集』よりも早い用例として注目できる。

以上のように、三代集における飛鳥川の用例を『万葉集』と比較しながら検討してきた。『古今和歌集』以降には、昨日や今日といった言葉、淵瀬という言葉と飛鳥川との結びつきが顕著になる。それによって飛鳥川の歌は無常観をもって詠まれるようになるのである。ただし、飛鳥川の歌に無常観が備わる淵源は『万葉集』にあるようで、横山氏は「飛鳥川の無常は、「故郷」となってしまった明日香の移ろいを身にまといながら成立していった表現であろう。とすれば、無常を示す歌枕「飛鳥川」の素型は万葉にあるといえる。そして万葉時代の概念を着実に汲み上げながら、「飛鳥川の淵瀬」は産声を上げたものと考えたい」[15]と示唆されている。

三代集以降も飛鳥川の歌は無常観をもって詠まれており、『後拾遺和歌集』にも

（p）物言ひわたる男の、淵は瀬になど言ひ侍りける返り事によめる　赤染衛門
淵やさは瀬にはなりける飛鳥川あさきをふかくなす世なりせば　（巻12の696）

という歌が所収されている。これ以降も、飛鳥川という歌語は無常観との結びつきがより強調され、大坪利絹氏が「飛鳥の地は、飛鳥川を素材として、平安初中期では無常観よりは寧ろ急変相に照明が当てられていたのが、平安末から鎌倉期にかけて、無常観が鮮明に浮かび出る扱いとなり、室町期になってさらに人生的教誡性が付加させるに到った」というように各時代の風潮とあいまって展開していく。

こうした飛鳥川を詠む歌の表現が固定化される一方で、『新古今和歌集』にみえる飛鳥川の歌にはやや異なった表現の工夫がみられる。『新古今和歌集』が編纂された時代は、歌合の隆盛によって歌人同士が切磋琢磨し、歌学の研鑽が積まれるなど、新たな和歌の表現が追究されていたことは周知の事実である。そういった新風を目指した動向が飛鳥川を詠んだ『新古今和歌集』所収歌にも反映されている。

（q）題知らず　柿本人麿
飛鳥川もみぢ葉流る葛城の山の秋風吹きぞしぬらし
（『新古今和歌集』巻5の541）

（r）　権中納言長方
飛鳥川瀬々に波よるくれなゐや葛城山の木枯しの風
（『新古今和歌集』巻5の542）

(s) 泊瀬に詣でて帰さに、飛鳥川のほとりに宿りて侍りける夜、よみ侍りける　　素覚法師
故郷へ帰らんことは飛鳥川渡らぬさきに淵瀬たがふな

（『新古今和歌集』巻10の986）

(t) 天暦御時、屏風に国々の所の名を描かせさせ給ひけるに、飛鳥川　　中務
さだめなき名には立てれど飛鳥河はやく渡りしせにこそ有りけれ

（『新古今和歌集』巻17の1655）

(q) は (L) の類歌である。『万葉集』では作者不詳であったが、平安時代には柿本人麻呂が詠み人に比定されていたことは、先述の『拾遺和歌集』の事例をみてもわかる。この (L) を本歌取りしたのが (r) である。『古今和歌集』(a) や『拾遺和歌集』が本歌取りするさいに飛鳥川を龍田川へ改変しているのに対して、『新古今和歌集』(r) は飛鳥川としている。加えて、「葛城山の木枯しの風」という表現は『万葉集』(L) の「葛城の山の木の葉が今し散るらし」に影響を受けていると考えられる。飛鳥川の「瀬々」を詠みこむのも、実は『万葉集』の飛鳥川にみられる手法である。すなわち (r) は万葉歌の表現を積極的に取り入れながらつくられていると理解できよう。

(s) は、素覚法師が飛鳥川を実際に見て詠んだ歌と考えられる。平安時代に詠まれた飛鳥川の歌はそれを目にして詠んだものではなく、また物語文学の世界においても登場人物が飛鳥川を見ることはなかった。それに対して (s) は飛鳥川を実景として詠んでおり、飛鳥川が「故郷へ帰らん」とする自らの行動の妨げとなるのではないかと危惧しているのである。詠み人の身体と現実の飛鳥川とが結びついている表現が、実景としての飛鳥川を際立出せている。

(t) は、村上天皇の時代 (946～967) に屏風歌として詠まれた歌である。たとえば、大嘗祭のときに悠紀・主基に選ばれた国郡の風景を屏風に描き、歌を記した色紙を貼付することがある。当然、歌に選ばれる名所はその地域を代表するものである。(t) の「国々の所の名」がどういった範囲なのか判然としないが、屏風歌として飛鳥川の題が選ばれていることから、飛鳥川は名所として非常に著名であったことが窺える。土地と飛鳥川とが強く結びついている用例として注目できる。さらに歌の表現についてもみてみると、飛鳥川は淵瀬が変わりやすい（定めなき）川であるという常套を逆手にとって、自分が以前に渡ったときと同じ姿であって決して変わっていないと詠んでいる。(s) と同様に、自己と飛鳥川との関係性がみてとれる。ちなみに、『新古今和歌集』の編纂直後に催された『健保名所百首』においても、藤原定家が「さざれ石は巌となりて飛鳥川ふちせの声を聞かぬ御世かな」(1023) と詠んでおり、やはりこれも (t) と同様に飛鳥川に固定化された表現を逆手にとった表現であることがわかる。

以上のように、飛鳥川の歌は『新古今和歌集』の時代に新たな表現方法が試みられた。これは表現が比較的早い時期に、広い範囲で常套化していたためであろう。そのため、その逆手をとった表現が可能であったと考えられる。

おわりに

本稿では、飛鳥川のイメージがどのように形成・享受されていったのかを明らかにするために、『万葉集』および八代集に所収される飛鳥川が詠まれた歌を検討対象として考察を試みた。最後にそれらをまとめておきたい。

『万葉集』にみられる飛鳥川は、①水量が多く流れの速い川、②永遠に変わらない川、③神聖な川、

④故郷である飛鳥に流れる川というイメージをもっておおむね詠まれているといえる。それが『古今和歌集』以降には、新たな表現がみられるようになる。ひとつには、飛鳥川の響きから昨日・今日といった言葉を導くようになること、もうひとつには、淵・瀬という言葉がひとつの歌のなかで詠みこまれるようになることである。ただし、これらの表現の基盤は万葉歌にすでにあったものであり、飛鳥川の歌に無常観が顕著にあらわれるのも万葉歌のイメージが昇華されたゆえであると位置付けられる。

やがて『新古今和歌集』の時代になると、飛鳥川の固定化した概念を逆手にとった新たな表現方法が試みられた。これは飛鳥川を詠む歌の表現が比較的早い時期に、広い範囲で常套化していたためであると考えられる。

注

（1）資料上では飛鳥川・明日香川といった表記がみられるが、本稿では飛鳥川に統一する。

（2）筒井紘一「茶器―銘とその由来―」（茶道資料館編『茶の湯の名器―由来と銘―』茶道総合資料館、1988年）、島村芳宏「江戸時代における銘の展開―茶入・茶碗・花入・茶杓を中心に―」（『同書』）。

（3）八木意知男「歌銘の世界―茶歌道交流史の一齣―」（『同書』）。

（4）大河内定夫氏は「茶の湯には、茶を飲み、食事をするという実用的な営みの中に、絵画・書その他、美術工芸品を鑑賞するという高度な遊びの精神が含まれている。この高度な遊びを支える精神の一つに「歌銘」が存在すると考えられる」（408頁）と指摘する（「茶の湯道具と香（香木・薫物）にみられる歌銘の実態と分類について―和物茶入の歌銘を主として―」『金鯱叢書』第13輯、1986年）。さらに、宮嶋幸子氏は茶会において季節感をもたらしたのは小堀遠州からであるという従来の指摘について、それは遠州が茶の世界に和歌を積極的に取り入れようとしたことと強く関係していると述べる（「茶会における季節感の誕生」『美学芸術学』第18号、2002年）。

（5）『大正名器鑑』より抽出し作表した。

（6）前掲大河内定夫氏論文に詳しい。

（7）かつて万葉歌に由来して「児手柏」と名づけられた太刀が存在したことは、宮崎政久「「児手柏」考―閑話２―」（『刀剣と歴史』第688号、2009年）に詳しい。

（8）鈴木健一「和歌と絵画が出逢う時」（和歌をひらく第３巻『和歌の図像学』序章、岩波書店、2006年。）

（9）櫻井満「飛鳥の川と神奈備」（『古代の山河と伝承』おうふう、1996年）。

（10）本紙掲載の上野誠「故郷・飛鳥の形成」に詳しい。

（11）杉浦清志氏「飛鳥川の淵瀬―古今集九三三番歌の成立と受容―」（『日本語と日本文学』第21号、1995年）。

（12）横山聡「「名所歌枕」の発生と『万葉集』―「飛鳥川」の世界を通じて―」（『武蔵野女子大学文学部紀要』第1号、2000年）。

（13）忠住佳織「枕草子と歌枕「飛鳥川」―淵瀬の変遷過程を経て―」(『國文學論叢』第48輯、2003年)。

（14）川村晃生「飛鳥川の淵瀬」（『藝文研究』第77号、1999年）。

（15）前掲横山聡氏論文、10頁。

（16）大坪利絹「飛鳥と万葉以後の文学」(『続明日香村史 中巻』第四章、ぎょうせい、2006年)381頁。